

かわかみ通信

2020年2月
如月号

前号Vol. 39からの続きです。

仲哀急死の報はおそらく、香坂王、忍熊王にも伝わったと思われ、身の危険を感じ、神功の軍と戦う決意をしたのではないのでしょうか。兄の香坂王はイノシシに殺されたとき、忍熊王は戦に負け、敦賀から越前梅浦（うめのうら）に逃れて、その付近の賊を平定しつつ勢力をたくわえ、最終的には劔神社の神となったとされています。越前までの神功の軍が侵攻したという話はありません。従って神功の勢力の力は敦賀までで越前には及んでいなかったのではないかと。劔神社内部では気比大神＝仲哀とし、大和勢力に対しては伊奢沙別命としてお祀りして恭順を示す形をとったのではないのでしょうか。そのために気比大神という微妙な名の神を合祀したのではないのでしょうか。気比神宮側にも日本武尊、仲哀を合祀することにより、一定の力を持つ劔神社を中心とする勢力を慰撫する必要があったのではないかと思います。

劔神社でさらに注目すべきことは、織田信長の先祖が関係している神社だということです。織田氏は織田荘の荘官であり、また劔神社の神官として仕えていました。



劔神社の摂社織田神社

織田氏の家紋は「織田木瓜紋」（五つ木瓜紋）で劔神社の神紋と同じであることも注目です。織田氏は実は忍熊王につき従った一族、あるいは血縁の一族ではないのか？ 中田力氏に

よれば崇神～仲哀の時代は日本武尊の説話に代表されるように日本の各地に軍を派遣し征服しようとした時代とのこと。この一族は征服欲の強い人々ではなかったのか。忍熊王―織田氏はその血を引いているはず。さすれば後の世の信長の様々な強権的な逸話や王になろうとしていたのではないかとの説も理解できます。また、信長の朝倉攻めで信長が氣比神宮を攻めて灰塵とし、社家（神官の家系）をことごとく追放したのは千数百年を経た神功・応神への意趣返しであったのかも？

仲哀天皇が暗殺されたことと、信長で明智光秀という臣下に背かれたことも何かの縁のように感じます。こじ付けが過ぎるでしょうか。



織田信長自画像



明智光秀自画像

さらに余談が続きますが、私の父の出身は越前。親戚にも川上の名前が多いのです。全国的に川上という名前が多いのは熊本と越前織田だそうです。ひょっとして、私が戦闘的で気が短いのは、そのせいかも…?? (完)

川上医院 院長 川上 究

余談1【日本書紀成立1300年】

『日本書紀』は720年（養老4）に完成した歴史書です。今年でちょうど1300年になります。

天武天皇が、治世晩年の681年（天武10）に「帝紀」および「上古諸事」の編纂を命じました。およそ40年後の720年に舎人親王が元正天皇に、その完成を奏上しました。『日本書紀』は、30巻と系図1巻からなり、「天地開闢」から持統天皇までを扱っています。

『古事記』と『日本書紀』に描かれる神話は、大きな話の流れが同じであることから、「記紀神話」とも呼ばれていますが、細部を比較すると、両者には大きく異なる部分があります。

これは『古事記』と『日本書紀』では編纂する目的が異なっているため、『古事記』は、天皇の国土の支配や皇位継承の正当性を国内に示す目的で書かれ、『日本書紀』は、唐や新羅などの東アジアに通用する正史を編纂する目的で作られたとする説が一般的です。

余談2【本能寺】

現在NHK大河ドラマ「麒麟がくる」が始まっています。ご存知のとおり明智光秀が主人公ですが。クライマックスともいべき「本能寺の変」の舞台となったのが京都本能寺は有名です。その現第140世貫首を敦賀市元町にある古刹本勝寺の桃井泰朝さんが平成28年から勤めておられます。桃井日英上人です。



本能寺は門祖日隆聖人によって創建されて以来約600年を数える法華宗（本門流）の大本山であります。

山林を去り市中にあって多くの人々に「南無妙法蓮華經」をお伝えするために創建当時より町の中心地に位置しております。このためしばしば災禍をこうむり、地を変換すること4度、堂宇を再興すること7度におよび、今日に至っているとのこと。こうやって見ると、何故かしら本能寺が身近に感じられます。

ひちゃんま行く

またまたまたの

奮闘記 第十五弾

せきがはらこせんじょうのまき
【関ヶ原古戦場の巻】

本日11月3日日曜日、曇り空。オッサン3人集合。「行くぞ！」「何処へ？」定番の会話から始まり、暫し協議。「ほんなら関ヶ原やな」とのことで滋賀県に向けてレッツゴー！

関ヶ原の戦いとは、ご承知の通り安土桃山時代の1600年（慶長5年）9月15日に、美濃国不破郡関ヶ原（現岐阜県）を主戦場として行われた野戦だ。

豊臣秀吉の死後発生した豊臣政権内部の政争に端を発したものであり、毛利輝元を総大将とし宇喜多秀家・石田三成らを中心に結成された西軍と、徳川家



敦賀城主「大谷吉継」の自画像

康を中心に構成された東軍の両陣営が、関ヶ原での戦いを含め、各地で戦鬨を繰り広げた。この戦役の結果、豊臣政権は統一政権の地位を失った一方、勝者である徳川家康は強大な権力を手に入れ、江戸幕府確立への道筋が開かれることになる。東軍・西軍合わせて15万とも言われ、天下分け目の決戦であった。

この戦に石田三成の盟友、敦賀城主大谷吉継が参戦した。小早川秀秋らの寝返りがあり、大谷隊は包囲・猛攻を受け防御の限界を超えて壊滅、吉継は自害した。吉継の首は側近である湯浅五助の手により関ヶ原に埋められ、東軍側に発見されることはなかった。現地には首塚も建てられている。生誕が永禄2年と永禄8年説があるため、享年が36と42歳の2説がある。いずれにしても若い。

一方の石田三成は9月21日、逃げ込んだ自領内にて逮捕され

捕縛後22日に大津へ送られ、大坂・堺を引き回されて10月1日、京都六条河原において斬首された。首は三条大橋に晒された。

歴史に「もしも」はタブーだといわれるが、もし西軍が勝ち吉継が出世していたら、敦賀の街は大きく変わっていたに違いない。

さて話はヨタヨタ歩きに戻る。関ヶ原インターチェンジを降りると程なく古戦場跡、当方本日の目的は大谷吉継の墓参りと首塚参拝。まずは墓を目指す。今までのヨタヨタ歩きで山城などに登るのは結構険しい山道だったりしたが、ここはそれほどでもない。20分ほどで墓についた。



大谷吉継(吉隆)の墓。今も観光客や供養に訪れる人が絶えないという

この場所こそが、まさに「つわものどもの夢の跡」だ。その時代に思いを馳せて、吉継の冥福を祈る。少し下ると吉継の陣屋跡がある。ふと見ると観光地によくある顔出しパネルを発見。



観光地の何処にでもある顔出しパネル。オッサン3人無邪気にはしゃぐ図

やらないわけがない。ハイポーズ。

そこに偶然にもボランティアガイドさんがいて、暫し戦談義。向かいに見える山が松尾山との説明。そこは小早川秀秋陣があった場所だ。いまも陣旗がはるか彼方にはたわわと残っている。こいつの裏切りがなかったら、とつい思ってしまう。



後ろに見える山が松尾山、小早川秀秋が陣を張った場所

「よし、次は首塚や」ナビを頼りに探していると、何やら畑のど真ん中。近くで作業をしている人が居るが、広々とした野

中にポツンと祠が立っている。確かにここだ。案内板が設置されている。「西軍の敗北を悟った吉継が、敵に首を渡さないよう、側近の湯浅五介の解釈で自刃し、甥の僧祐玄(ゆうげん)が首級を綿の袋に入れて、敦賀への逃亡の途中に、この地に埋め隠したといわれています。今でも地元の人々によって大切に守られ、供養されています」と書いてある。



畑のど真ん中にある吉継の「首塚」

盟友三成との友情のため無理を承知で参戦。義を重んじた吉継の行動は今でもれき女に人気が高い。圧倒的不利な状況でも最後まで勇敢に戦った吉継は、まさに武士の鑑ともいえ、敦賀人としても誇りとすべき人物である。少しはその精神を見習うように決意を新たにしたいオッサン3人であった。(河)

【発行】令和2年2月4日(火)
かわかみ通信Vol.40 (如月号)

医療法人 川上医院
福井県敦賀市松原町1-39
TEL: 0770-22-0977